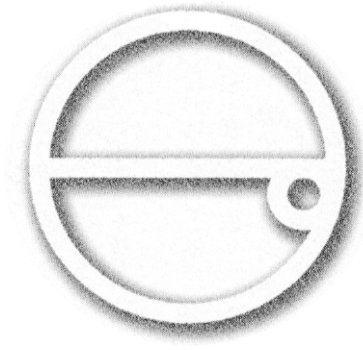


## 不生不滅 (ふしょうふめつ)



小野派一刀流紋章

初心の間は技が弱く生まれ、そしてすぐ滅んでしまうものである。それは目も届かず、つまり目付けが宙を追うが如く定まらず相手を見とおすことができない状態で、しかも腕は伸びず、足の運びも短く、息も続かず、“気”も短いからである。初心者の技はここで打とうと思い、卒爾<sup>そつじ</sup>として生じ、また直ぐ滅んでしまうことになる。浮足だって、今か、さらにまた今、今、という瞬間にボンボンと手数多く打っていく。そこには打ち出す一本を大切に<sup>な</sup>する心も、そして打ち出す必然性も、また必然性を求めたとしてもそこまでの我慢もない。そのような打突は

生滅が見てすぐわかるものである。起こりと終りが相手にはよく見える。すなわち見すかされる。すると、そこを防がれ、払われ、余されたりして打たれることになる。

稽古ではこの生滅がないようにしなければならない。生滅のない剣道を求めて日々稽古することである。多年稽古に励み、心身技能が上達すると、技を出して泥<sup>な</sup>まず、終ってそこに滞らず、というようになる。生まれて現れず、滅してそして絶えず、始めなく終りなく循環<sup>つづ</sup>端なきように遣うようになるのである。

打っては、またすぐさま切先を正しく生の間にもどし、生の間にあってまた打ち出す。わが竹刀は常に生き、われは常に生の間にあって滅することなきように心がける。生の間にわれがあれば、相手のどんな動きにも即応することができる。相手の技の起こりを知り、そこに乗る。あるいは相手の技を留め、技の終りを見極めて、これに乗っ取って勝つのである。この工夫を心掛けて稽古を積むと、不生不滅の理に至り、必勝不敗の境に達することが可能となる。

生の間にあって滅することがないということは、すなわち残心である。

残心というのは心を残そうと思って残すことではない。打つべき時は万心を捨てて一心不乱に打ち込む。かわされるだろうとか、今が本当に打つべき機会だったろうかといった万の心を一切捨て打ち込むのである。それが誠心である。そして万一はずれてもこの誠心があれば返りあってまたもとの“生”地にもどるものである。

勢よく捨てたものは向うへつかえる。するとその反動で自然に残りが撥ね返る。つまりこれである。例えば太鼓を打つ者の棒が打つと同時にもとの前に返るようなもの。打ち終わった後を初め

の締りとなすことが大切なのである。古いものを一切捨ててかかると新しいものが備わる。この新しい心、気、技が備わるのが残心である。

勝負に臨んで一度打って技が終り、構え、切先、体、心が尽きたなら、そこを相手から打たれると応ずる備えがなく、負を喫することになる。従って、打って尽きず、突いて止らず、勝ってなお許さず、油断なく、常に心を満たしていなければならない。

残心を常の稽古で心がけ、払っても、流しても、また打っても、突いても、自分の切先は常に生きて相手の真只中を指し、少しも許すことのないようにすることが大切である。

充分な残心があって、不生不滅の理が生まれるのである。

### 八方満心（はっぽうまんしん）

相手がどこから攻めてきても、直ちに応じ、また相手のどこに虚が見えてもすぐにこれを打つ技が出るようになるためには、わが心を四方八方に配っておかなければならない。それはちょうど水が方円の器に従って移るように、相手の動きによってそれぞれ対応する心がけが大事である。



打方 笹森 建美十七代宗家 仕方 清水 公大(剣道教士七段)

四方八方とは全方向である。心を一方に偏することなく体中いっぱいにしておく。そうすれば相手がどの方向からきても、瞬時にその方向へ心が向き、心で応答し、能動的に発せられて気となり、相手に対応することができる。満身に満心を保つのである。

心がそうである限り、相手の全ては見えて、泰然自若として余裕のある動きができることになる。

ところが、心が一方向、あるいは一つのことに凝滞することがある。心気の居付きである。居付けば、技は出ず、負けとなる。手足は凝り、守りながら守りが成らず、相手の思うように引き回されることになる。

要するに相手の姿と所作動作に目が居付き、心が居付くのだが、それは、驚、怖、惑、疑の四病であり、さらに加えれば、臆する、<sup>おこ</sup>侮る、<sup>あなど</sup>驕るも含むことができる。すなわち七病である。

また、自分の得意技を出そうと、それだけに心捉われ、その強いところに居付き、あるいは構え

が堅いと思ってその構えに居付き、ここが弱いと掛けてその弱いところの守りに居付くなど、みなよろしくないものである。小手打ちが得意だとして、その小手打ちを出したいがために、相手の小手に心も気も目もいく。これは全てに凝った状態であり、その初動からして、相手にはよく見えるものである。

一つ覚えた得意技のみにたよらず、よくよく相手の一瞬の動きに乗り、そして移ることが大切である。しかも主心を失わないように工夫しなければならない。

主心とは打つべきところで正しく剣を遣うことである。野球を例にとるとして、自分はいま打席に入っている。相手は剛球投手である。相手は打たれまいとしてカーブを投げたり、コーナーに散らしたりしてくる。そのような<sup>かくらん</sup>攪乱にも自分を見失うことなく、ひたすら相手の剛球を待つ。そしてついにその剛速球が真ん中にくる。それをこの時とばかりに打つ。主心とはそのようなものである。

剣道ならば、外の状況を見極めつつ、われを見失わず、源を常にわれに発して<sup>き</sup>湧え湧えとしてあれば、いついかなる場合でもその用を便ずることができる。それは、あたかも水が方円の器に<sup>みな</sup>滲え、時に飛瀑となり、そして大洋となるが如く、みずからの形に居付くことのなく、しかも上善の用をなすようなものである。

居付かないためには、心を流転させることである。流転させるためには生き生きとして心、まずこれを四方八方にいっぱいにすることが大事である。いっぱいに満たすと、自然に円くなるのが道理である。しかし円がよいといっても円いままでは四角に入ると角が<sup>す</sup>隙く。それならと四角にする。しかし今度は四角なものを円の中に入れると、また隙間ができる。要するに円がよいとか四角がよいとかいうものではない。本来、円もなく四角もなく、器に従って移り、機に乗じて変らなければならないのである。相手の使い方次第ということである。

八方に心を配って満心とし、その心でどの方向においても応答し、左右・前後・上下その他いずれからでも打ち込み、またいずれの攻撃にも即意し得ることが大事である。そしていかなる時においても安泰であり、かくてすべての技の働きにかなうことになる。

## 万有が一に初まり、一に帰す

一刀流の哲理は『万有が一に初まり一に帰す』原則に立つ。すなわち『一刀即万刀』であり、一刀に万刀を乗せ、万刀に一刀を配するのである。

この理による組大刀は、いろは四十八文字に<sup>なと</sup>譬えられる。初めに習う時は、い、ろ、は…と一字ずつ順に覚え、一旦覚えたならその順序を捨て、必要に応じてこれらを自由に組み合わせで言葉と

し、文章を綴って用とする。組太刀もそのように初めは一本一本正しく習い、覚えたものが後には敵の有り様に応じ、いずれの用にも働き得るようにするのである。つまり、たとえば切落しの一本の理が組太刀百本に乗り移り百本の技が切落し一本に帰する。百本の技が各々離れ離れにならないよう、一貫して一本に遣うということである。

手の指にも<sup>たと</sup>警えることができる。儀式の始めに遣う太刀である『三重』は拇指で、大太刀は人差し指、刃引を用いて行なう『刃引』は中指、秘中の秘極意『払捨刀』は紅指、そして『小太刀』を小指とし、これらを握ると一つの拳の働きができるようにするということである。

「一刀に万刀を乗せ、万刀に一刀を配し、これを一心に具足して十万に透徹し必要に応じて可ならざるなきにいたる」－これが『一刀即万刀』の本旨である。

### 心氣一如（しんきいちじょ）

心の働きを全うするには、知情意の一致を期さなければならない。明知は万象を照らす鏡である。この鏡に映った姿を清浄な純情をもって果断処決する雄渾<sup>ゆうこん</sup>な熱意を働かせるのである。この知情意一束一団の心が満ち満ちて、その潜在力が能動の力となって爆発するとき、それは強烈な“氣”となり、大事を成し遂げることになる。その“氣”こそが豪氣と呼ぶものであり、また“生氣”ともいう。

“生氣”の対語は“死氣”である。“生氣”は完成を目指して、永久に進む働きの継続であり、産まれる所、起こる所、伸びる所、増す所、強まる所、働く所の氣である。“死氣”とは絶える所、止まる所、縮まる所、弱まる所、休む所の氣である。勝負にあたっては、常に“生氣”を養い、“死氣”を退けなければならない。懸待一致のことというのがあるが、その懸中待は動中静であり、待中懸は静中動である。これを心技に備えるには、常に“生氣”を保つことにある。そして保つには養うことである。養うには法がある。それはひと端ひと端に思い新たにし、不断に励むことである。そのことにより、循環に瑞がなくなり、“生氣”も限りなく盛んとなるのである。

氣の理解が進めば、心との関係はおのずと解ってくる。例えば、心は薪<sup>たきぎ</sup>で氣は火のようなものである。薪が湿っている。あるいは少ししかないとする。すると当然、火は燃え上がってこない。また燃えたとしても火勢が弱かったりする。そこで盛んな火を燃やすためには乾いた薪をたくさんに、または良質の石炭、石油を多く用意する必要がある。この乾いた薪、良質の石炭と石油を用意するということは、要するに心の明哲、純潔、健確を長養しなければならないということである。

心は実であり、本体本質である。氣は用であり、より具体的に変質し、運用すべきものである。もちろん、その関係を認識したからといってすぐに発揮されるものではない。日頃の稽古で氣を、豪氣、生氣を養うようにしなければならないのである。二葉から苗、成木、そして空を蔽<sup>おほ</sup>う大樹と

なるのには、幾百年もの間、雨、露、風、雪、寒暑をしのいでくるように、豪気の大成には多年の熱心な稽古が不可欠である。呼吸の調えを考え、丹田を意識し、丹田で吞吐しながら、努めて強剛の者と立合って心気胆力を練り鍛えるべきである。気烈しく、勢い盛んに相手を制すると、激流の疾き、岩をも漂わすようになるものである。

### 流露無碍を志す（りゅうろむげ）

一刀流組太刀の技の稽古では、体と技の凝り固まりをほどき、柔らかく大きく素直になることを学ぶ。すなわち流露無碍を志すのである。氷をとかして水となし、岩を砕いては粉となし、方円の器に従い、敵のどんな隙にも流れ入って滞りがないようにする。敵の架（構え）の動きに従って打ち出す大刀の向うの勢いを流しそらし、われから進んで柔らかかに勝つのである。もしわれが勝気を強くし、日を剥き肩をいからして、ただ敵を打とう、われは打たれまいと力みを出すと、わがなすことは兎角の色に出で、敵に取り付いて心が動き、角張って悶え行き詰まり、そこを敵から乗ぜられる。だからすべて敵に取り付かず居付かず、無為無心となって一刀を滞りなく繰りかえし繰りかえして打ち流し、丸く柔らかく遣い馴れることである。そうすれば、われと敵とは一体になり、正しく勝つべきところにわれ勝ち、流儀の極則たる流露無碍の妙域に達することができるようになる。

### 万水映月（ばんすいえいげつ）

一刀流仮字目録に“水月之事”とある。これは稽古に当たって相手に対する時の心境の理を説くものである。

まずその水の心だが、わが心が水のようになって清く澄み、風なく静かであれば、満月は円く、三日月は細くと、それぞれの月影を宿して手に取るように明らかである。しかし水が濁って波立つと、月影は清かならず、また定かならず、形乱れて映る影は千々に碎けて捉えることができない。

剣道もまさしくこれと同じである。相手に対し、攻めようともせず、また防ごうともせず、平然と相手を見れば、相手の形色がことごとくわが心の鏡に映る。もし相手を打つことだけに心が騒ぐなら、心が一所に凝って心が抜け、相手の思惑もわからず、かえって相手に乗ぜられる。また防ぐことのみに心が凝られれば、われは死物となり、当然、相手の姿を見抜くことはできなくなる。

従って、心は澄んで静かであることが大切である。心がそうであれば、われより烈しく懸る間にも相手の応変がただちにわが心に映り、守るときにも相手の隙が見えて瞬時に打ち込むことができるものである。わが心を静かな水のように養い慣れさせることができるなら、常に真如の月が映るよ

うに応変自在の活動ができ、勝たぬということがないのである。

月の心、これは稽古に際しわれは月のような心となって相手を一体に見下ろすということである。

月は中天に懸かって山を照らし谷を照らし、野を照らし家を照らし、草木を照らし人を照らす。

これを照らし、あれを照らさぬということはなく、<sup>しょうしやう</sup>昭々として万物を照らすのである。

その月と同じように、われは相手を照らす。相手の形相をことごとく照らす。そして相手に隙があれば瞬秒の間をおかず直ちに打ち込む。それは障子を開くるやいなや、座敷に月の光が射し込むのと同じである。かりそめにも<sup>こま</sup>狐疑の心を起こし、渋り滞るところなどあってはならないのである。

しかし月が曇れば、地上を照らすことはできない。剣道でいえば、われに<sup>じやねんもうそう</sup>邪念妄想があると相手の実相がわからない。これと同じである。相手がわからないということは隙があってもそれが見えないということである。

また月が欠けるように、わが心に欠けたところがあると光が薄くなる。これも曇りと同じことで、相手がよく見えないということになる。

このように考えると、いつでも<sup>こうこう</sup>皓々たる満月が晴天に輝くような心境を養って相手と対し、そして相手の実相をよく見て、明るく真っ直ぐな技を出す稽古が大事だとわかる。常に真如の月をわが心とすることを学ぶべきである。

そして万水映月の教えだが、万水の“万”はあらゆるという意である。明月は到る所として照らさざるものがない。また水あればそのことごとくに映る。大海に<sup>えい</sup>映じ、湖沼河川に映じ、水鳥の<sup>くちばし</sup>嘴振る水にも葉露にも映ずる。大に映じ小に映じ、動に映じ静に映じて浅らすところがない。われはその月ともなり水ともなることが大事である。相手が面を望むのが見えると、われより小手にいき、あるいは突きに出る。また相手から突いてくれば交わして払い、面なりを<sup>おろ</sup>襲う。出れば迎え、逃げれば追う。つまり相手の心の微妙を知ってわれより即刻これに應えるのである。

稽古の初めのほどは、相手の体や竹刀の動きが見えてからこれに応じて打突をかけるものだが、熟達してくると相手の体が未だ技を出さずとも、その心気が<sup>かす</sup>微かに動いたところで、ことごとくわが心に映るものである。それには常に不動の心を養わなければならない。

不動の心、それは危機に臨んで心気転倒せず、しかも邪念妄想の去った動かない心、揺れない心である。勝とうとか、負けまいとの欲望を捨て、心の暗雲を取り去り、ただ真心をもって稽古にいそしむのでなければ得られるものではない。

この不動心が養われ、そこに初めて万水映月の境地を知るのである。

そしてこの境地を知ったなら、相手との一体のこと、和のことに思いがいく。自分が相手の月となり水となるのである。自分が月とすれば相手は水である。相手の水に月の自分が映る。そしてそ

れはまた、そっくりその逆に立場を変える。

相手の目を見れば、その目にわが姿は映し出され、そこに勝負を超えて、互いの和の心が見えてくるのである

## 氣理合一（きりごういつ）

一刀流の口伝秘記に伝えられるところは、およそ次のようになる。氣の雄渾<sup>ゆうこん</sup>な大勢がよく理に合してこそ大勝を博することができる。大勢が真理にもどると却って大害を招く。敵に向かい理に逆らって勢込んで打込むと足場を失って反り討を食らう。理に悖<sup>もと</sup>る邪剣の氣勢は自滅を急ぐに過ぎない。心と太刀筋を正しく英気を振るって順理に進み天命に服する剣はおのずから勝を全うするものである。氣と理は合して一つであり、決して別々であってはいけない。そして英気を振るい、順理に進むことが大切だと説くのだが、例を挙げながらさらに解説を加える。



まず氣を静めて相手に対する。もし危急に臨んだとして、そのとき氣が騒ぐと、みずから敗を招くことになる。それはちょうど水動いて魚驚き、水槽から飛び出るようなものである。従っ

て平常から氣を丹田に納め、驚、怖、惑、疑、臆、侮、驕の七病を去り、渾然として、理の則るべき端を捉え得るようにならなければならない。豪氣、英氣も正理を逸すると大害こそあれ、一利もない。例えば、順風に帆をあげ潮流に乗って進むと快速に走るが、逆風に帆をかけ逆浪に抗すると転覆する。また、流水原野に流れていたとする。それが横溢<sup>あふいつ</sup>氾濫したのは田畑や人畜<sup>わづわい</sup>に禍を流すのみである。しかし理に則り、道によって奔<sup>はし</sup>れば発電、灌漑、飲料など、みな役に立つ、

稽古においても、氣の發現である掛け声を虚実戦力の駆け引きに使うのでなく、氣を理に則って正しく使いながら、まず理によって勝つことである。そして打突を、理合正しく筋道正しく法に則って使うと、止むに止まらない尊い勝が生ずるものである。奇勝や騙<sup>き</sup>打ちは、恥じるところである。

孫子は「兵は詭道<sup>き</sup>（あざむくこと）なり」と説くが、その言は日本人のとらざるところで

なければいけない。われらは常に真鋭、すなわち正道を尊ぶべきである。

気理合一を目指して稽古に励み、そこに必勝の神機が出てくることを求めて進むのである。神機とは絶対の機でもあり、またそれは字句の示すとおり神の与えたもう機でもある。修行する者が懸命に努力する。そこに神が応え、神の助けが現われて、それがすれ違うことなく一致する。神機が得られるなら、まさに必勝である。

## 間之事

一刀流兵法十二ヶ条目録に「間之事」という教えがある。間というのは、太刀技が働く<sup>かねあい</sup>曲尺合の積りのことである。構えから打突の起こり初めのところは力がないし、終るところも力が尽きている。丁度勢いの盛んなところで斬り突かなければならない。矢丸でも弦や筒から出るところや、末のところでは十分に効かない。必ず或る行程の曲尺合で有効に働くものである。火鉢に子を<sup>なげ</sup>翳すのも、火に触れてはいけないし遠すぎても役に立たない。丁度よい距離がある。これはみなよい間である。太刀技の最も有効に働くよい間をわが体と相手の体との距離においてとらなければならない。

間を常に己に勝手がよく相手に都合悪く据えるのは勝の始まりである。われによい間を取ることは日々鍛錬の結果で得られるものである。形においては双方の切先の争いに現われる。付き離れから抑え込み、引きはずし、巻き抑え、張り落とし、乗り付け、払い除け、打ち落としなどし、互いに勝手のよい間の取り合いから始まる。わがよき間を取ったら、使者太刀の応接を遣うか、または一挙に長軀して切り込み勝をあげる。

間は距離ばかりの事ではない。心の間という事があり、この心の間が一切を取り極める。心の間とは、相手の心の<sup>きざ</sup>芽す切先にわが心の端の切先をつけるその積み合いのことである。わが心の切先の端には相手の心を真っ直ぐに貫く成力がなければならない。この威力は死を恐れず生に執着せず、<sup>つね</sup>恒に道に<sup>したが</sup>順うことを旨とし、信之真剣の心得にて進む鍛錬によって得られる。

心の間を折角よくとっても技が未熟では行程に<sup>つまづ</sup>躓きが出て間に合わない。十分に練り鍛えた技を以てよい心の間を生かさなければならない。達してはこの間を透得し、心に間を置かず、間に心を止めず<sup>じゅんたつ</sup>潤達自由に生死の間を出入し、来住自在に在ることになるものである。

## 理気不二（りきふじ）

理機不二、あるいは理機一閃ともいう。

理は、打突に帰結する際の一連の過程を調える則であり、機はその過程において開閉する一閃の小口である。すなわち理に則って施すべき小口の機があり、その機を捉えて打つことが大切なので



ある。

理は静の則であって、決して動の働きではない。理の役に立つのは、これに則って行ない、よい結果、真正の勝ちをあげることにある。静あって、動が生まれるのである。

理の静寂を捉え、能動の轟とどろきを発する小口は機であり、その機を識らなければならないのである。ここが、理が機を生み、機が理に順う理気不二のところである。理は単にこれを追うだけでは、どんなに長く努めてもその用を成し得ない。勝に至る道には、必ず理の生ずる小口の機、これを捉えなければならないのである。

しかしこの機は一瞬にして来たり、また一瞬にして去るものである。だから必ず前から迎え取るべきであって、後から追いつくべきものではない。追った時は、すでに去っているものである。そして一度去った機は二度とふたたび来ない。追いつき、それにこだわると必ず負けとなる。

ところが、よい機は理に従って、また新たに生ずるものである。正しく理の別に従って過程を調える。そして、もしそれが前回と全く同じように出来て、相手も動いたとしたら、小口の機が同じになるのは道理である。これがある程度できるようなら、そのときの打突こそ、その人の得意と称していいだろう。

同じか否かは別として、とにかくこの新たなる機をつくることに工夫し、一本ごとに心気を新たにして稽古に励み、この秘法をわきまえて使うならば、今後はわが望む通りの機がいくらかでも生ずることになる。そしてこれを迎え捉える。すると機は常にわが掌中の玉となり、必勝を得ることとなる。

理機不二の次にくるのは機ずいそく術隨即である。

稽古を積んで怠らなければ、ついに機に従って即座に術・技を施し得るようになり、勝が形となる。逆に、機が至らないとする。するとどんなに



理を追い、術を試みても無益である。またせっかくほどよい機が湧いても、そこに投ずべき正しい

術を持たなければ無為ともなる。ゆえに磨くべきは機術隨即の実力なのである。

日頃よく心の修行を積み、体の鍛錬に励み、術の発動に習熟しているなら、勝に至るべき微妙な神機が目に一閃するや術が隨即して勝の成らざるはないのである。

術は万理を決するものであるから、術は日頃鍛えに鍛え、磨きに磨いておかなければならない。どんなに心を修め、大智をしぼって思いをめぐらし、また勇猛の豪気を発して邁進<sup>まいしん</sup>しても、あるいは理をきわめ、正しくその則に従ったとしても、そして好機が到来しても、その一瞬にずばりと打って出て術の実効があがらなければ、それはみな無用の死地を走りめぐることになるのである。

剣道は心に始まり、術で帰結する。この術の用はそれだけの大きな意味を持つのである。

## そくいの心

敵の意を見てその意に即しつきまとい、敵が嫌ってのがれようともがくところを意表にはずし、その転機に生じた虚を捉えて勝つのは「そくい<sup>そくい</sup>の心」である。「そくい<sup>そくい</sup>つけ」は即意付とも続飯付とも書く。そくい<sup>そくい</sup>付けは敵の意の赴く所を見て先ずその通りにくっ付いてゆくことである。敵の太刀にわが太刀をぴたりと付け、敵の意に添ってどこまでも付いて行って敵に技をかけさせないことである。即意付を続飯付とも書くのは、すなわち、わが意を糊にして糊をもって敵の太刀に添って付け回し、離さないことである。しかし、付けるのにはよく付けるが、付けるのは付けるためでなく、離す好機を生むのがその目的である。離す途端に生じた機会を捉えここに勝つのが、主旨である。

## 五格一貫（ごかくいっかん）

五格とは、心、氣、理、機、術をいう。

まず心がけがよく養われることが大事である。単に心が養われるというのと、心がけが養われるといった場合は、そこに時間経過の有無が存在する。心がけの「<sup>が</sup>け」とは、常に、あるいは日頃からという意味を含むのである。

その、心がけが養われ、明知、清情、熱意が渾然と統合し、一度発して強豪雄大な氣となり、氣が働いて真正<sup>ふえき</sup>不易の理に合し、理が行なわれて神速微妙の機を生み、機に乗じて必勝不敗の術を施す。すなわち、心氣理機術五格一貫、一連託生<sup>いちれんたくしょう</sup>である。

逆を追っても、五格は一連であり、一貫である。

すなわち、必生の術がよくその効を決しなければ、どんなよい機もむなしく去る。せっかくよい機が出て応じて、われが理に合っていなければ施しても無駄である。またどんなに技とか防ぎ方といった手段を尽くしたとして、氣が乗らなければ成就には届かない。そして氣合ばかり盛んであっ

でも、理、つまり剣の理を失えば、自ら死地に陥る。豪氣は明らかな知、純正で清い情、それと熱意、これらの知情意が一つとなった心によって<sup>つちか</sup>培わなければならないのである。やはり始まりは心ということになる。さらには、暗く、邪念のある心から生まれる氣は、もはや豪氣とは呼べず、一種狂氣となることもしっかり認識すべきである。そして、そのような心であれば、知性を欠き劣情に躍り実意のともなわない稽古となることは必定で、<sup>いや</sup>賤しむべきものである。

妙術は、人為のものでなく、天地自然の理、いうなれば宇宙の理、または神の与えたもう機、その神機によって仕い、その神機は真理を備えて生じ、真理は豪氣を得て充たされ、豪氣は誠心に従って養われる。であるから、まず修むべきは心なのである。

<sup>もと</sup>本立って道生ずるは道理である。この根本を心に正しく確立してから、心気理機術一貫、練磨不偏、<sup>えんまんくそく</sup>円満具足などの<sup>みょうてい</sup>妙諦を学ぶべきである。

本来の成すべきことが成されず、本が立たなければ、その先の道はない。

## 丹田八九の納(たんでんはちくのおさめ)

丹田は精神統一の焦点である。<sup>せい</sup>臍下三寸のところといい、一寸半ばかりのところともいう。要するにその辺である。体気をここに凝集すると健康が養われ、<sup>ぼんぼつ</sup>精気をここに集中すると豪勇が勃発する。これを下丹田というのである。

寸田は上丹田ともいい、両眼の間、また両眉の間を指す。上丹田がすわると<sup>けいじか</sup>形而下の万象を一目見て、その実相を即座に明断し、過ちがない。諸幻ことごとく滅して明察即断まがうことがないのである。そしてこれを下丹田に疎通するとその真相が解かり、即刻果断の効を得ることができるわけである。

この寸田と丹田の一如は、姿勢を正しく保って相手と対し、攻めても守っても、打っても突いても常に上体が垂直で寸田と丹田との二点が真上から見て一点に合し、外れないように慣れることで得られる。そしてこの一如があって、明知発達、心気沈着、妙技無尽となるのである。

目だけすわっても、肚のすわらない稽古、また肚だけすわって目のすわらない稽古は、共に伸びないものであり、要は丹田・寸田一如の稽古こそが最も望ましいのである。

上下丹田の一如があって必勝が期待できるのではあるが、そこにはもう一つ、必ず<sup>そんせつ</sup>擗<sup>ゆうゆう</sup>節の悠裕がなければならない。擗は相手を敬う心であり、節は節度である。そしてこれを丹田八九の納めという。八九にして十とならず、あえて満たさない。この満たさないところの一あるいは二、これを見ずからの足らざるところとし、常に省みて、傲らず、もって溢れずこぼれず、損ずることのないようにするためである。

知に溺れ、気に凝り過ぎ、丹田の上下がみずからの意図するところ、計略が溢れ出ると、技は上ずり、思わぬ不覚をとることがあるものである。

そこでわが明知も豪気もお十中一、二足らないと心得るのである。謙虚な樽節である。この心得があれば、あやまちを犯さず、しかも無限の向上が約束される。

しかしそれは丹田を器とし、その器の規模を八九のところに抑えよというのではない。丹田自体の規模は充分な大きさに養い育て、しかしそこに容れられたわが明知豪気はいつでも八あるいは九よりないのだと反省して、稽古に全きを求めるのである。

丹田に、その器いっぱいのお十が入っている。しかし、その八か九より使えないものと認識することである。

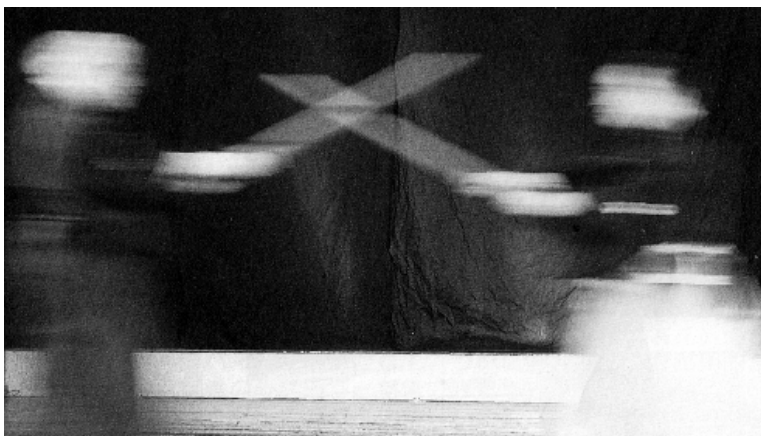
車を例にとれば理解が早い。いまわが運転する車は時速150キロの性能を持つとする。しかし意識では130キロより出ないと常に自覚しておくのである。いかなる時も130キロの性能と考えれば、そこに20キロの余裕がある。この余裕が大事なのである。

剣道でも同じこと。余裕の心があれば危急に充分な対応ができるものである。逆に十あって常に十で対応していれば、それ以上が要求される場面に際し、もはや満足な対応は不可能となる。

車しかり、剣道しかり、人生しかりである。

## 二つ之目付之事

「二つ之目付之事」という教えがある。人には目が二つあり、一つの物を見るのにも二つの目をつかう。片目で一方から見たのでは物が平面に見えて、立体の真相や遠近がはっきり判らない。両眼



で見て始めて実体が正確に判る。

また、物を見る時に目についた表面の一部分だけに気をとられたのでは本当の物を見そこなう。一部分と全体を見るべきである。とくに目についた部分が全体の中でその一部分と最も関係の深い他の要

の部分を見のがしてはならない。例えば相手の構えが正眼または下段ならばその切先と左右の拳と足と全体を見る。上段ならば切先と前拳と<sup>ひじ</sup>肘と足と全体を見る。いずれにしても相手の切先が動か

なければ、われに触れるものが出てこない。切先の動きは手足と体に従って出てくるのである。相手の切先が動いた時には、右にばかり目を止めず左をも見る。上を見るとともに下をも見る。引くと見たら出るとも見る。

相手の動く形だけ見たのでは、部分と全体を見ても真相が掴<sup>つか</sup>めない。切先の動きは心の命によるのであるから、相手の切先の動きの形を肉眼で見るほかに、相手の心の動きの意を心眼で見透さなければならぬ。そこで相手の身体と心理とを見る。相手の眼中と心中を見る。すなわち有形と無形とを見るのである。

太刀技には必ず始めと終りとがあるから、相手の技の起こるところと納まるところとをともに見て応ずるべきである。太刀技の働いている最中は勢いが烈しいから、そのところを見損なってはならないが、その起こり頭と尽きたところは勢いがないので、しっかりそこを見て制することである。

相手と己れを見る心がけが必要である。相手に勝つべき相手の虚を見い出して乗り取るばかりでなく、己れが敗れる隙をかえり見て備えを完くしなければならない。己れをかえり見るのにも、己れの勝つところはここ、負けるところはここと、この二つをよく見わきまえて、勝つところを養い育て、負けるところを補なう稽古に励むのである。師や先輩に打たれて稽古するのはそのところである。

二つの目付といって、二つばかりに限ったことではない。この二つから如何ようにも変化するのである。従って目も心も居付いてはならない。常に移り変わる刹那<sup>せつな</sup>に、永劫<sup>えいこ</sup>を見、また永劫に一瞬の変あるのを見のがさず、大局に一局を見、一局に大局を忘れず、活眼を開いて彼我の有無と一切の一元を見ることを本旨とするのである。

## 遠近之事

「遠近之事」という教えがある。相手を己れより速く離し、われには容易に近寄れず届かないようにしておきながら、己れは相手に近くにあって立ち所に切り突くことができるようにすることが心得である。

彼我は同じ物理的距離であるのにどうしてそんな差ができるのか、それは体と心の待ち方によるのである。

体の取り成しでは互に一足一刀の規矩<sup>きく</sup>で立合っていても、反り身になると相手から速いが、わが進退も思うに任せず、従ってわれからも相手に速くなる。そうかといって懸かり身になると、われから相手に近くなるが、また相手からもわれに近くなる。そこでまず身体は反らずかがまず真っ直

ぐにすべきである。また大事なことは足遣いである。歩幅が広く手が伸び過ぎては、相手から遠いが、われからも遠くなる。歩幅を狭く手を屈めて切先を合わせると、われから相手に近くなるが、相手からわれにも近くなる。そこで、歩幅は広くなく狭くなく常に歩むようにし、脚と腰の弾力を養っていつでもどこへでも速やかに、前後左右に進退跳躍し応変が自由自在にできるように心掛けなければならない。

速逸の差の生ずるところは、身体を取り方と太刀の長さとはどんなに工夫しても物理的に限度がある。それを超過するのは心の遠近である。わが心を丹田に納め、氣迫を盛んにし、嚴然と相手を攻めると、相手はこの氣に圧せられて逃げる心になるから、そこで初めてわれより相手に近く、相手よりわれに遠くなる。相手に防ぎ逃げる心のみあって攻めかかる心がないと、相手はわが足許におっても禍<sup>わざわい</sup>は千里の外にあり、この時われから近く、一足に踏み込んで一刀の下に制することができる。つまり彼我の心の働きによって、近きに遠きあり、遠きに近きがある。同じ距離が、近くなったり、遠くなったりするのである。そこで一刀流で教える真・行・草の間合の遠近についてもまた夫々に生死の遠近があるものと知らなければならない。

一度心に勝って生きると死の禍から遠いこと甚しく、一度心に敗れて死すると、生の利から速いこと無量である。一刀流の執行（修行）の要諦はこの生死の別れ目を出入馳驅<sup>はしく</sup>しながら、生死の速逸を取り極めて日常心根体技に励み鍛えることである。

我慾の重荷を背負う罪人には極楽は百万億土の遠い所にあり、すべてを払捨<sup>ほうしよ</sup>し捧げて身軽な聖徒には天国がすぐ近くにある。業慾執念、怯懦退嬰<sup>きょだたいえい</sup>の者には眼前の目的も遠く去って成るということはないが、無慾恬淡<sup>てんたん</sup>、進取勇敢の者には遠くにある目的の方からわれに近づいて来て立ち所に成るものである。すべて義と愛に立って求める者は与えられ、尋ねる者は逢い、門を叩く者は啓かれ、励む者はこれを取る。波長に合わせると天涯も側近にあり、汲長をはずすと隣人も隔絶万里となる。

### 無縄自縛（むじゅうじばく）

毎日稽古を怠らず、懸命にがんばっていても、草木にいういちばん伸びる部分の芯が止まることがある。同期の者に追い抜かれ、後進者にも負かされ、いかに働いてもその進退全てに機を失い、技は遅れて届かずといったことが続くのである。そしてあせればあせるほど手足は動かず、気をもめばもむほど打突が外れてしまう。これは、それまで習い覚えたところにとらわれ、滞り渋るからであって、それを相手に見抜かれ、われより技が薄く練度の低い者にまで攻め立てられ、打たれ突かれしてどうにもならないことになるのである。

これは誰にでも、ある段階に経験するところであり、いうところのスランプである。機を捉えることができない。打突が遅れる。届かない。そして、技術的な伸びが感じられなくなる。まるで荒縄でがんじがらめに縛られてしまったような気になるのである。これを無縄白縛という。

多くの人はここでいやけがさし、稽古を怠り、またはやめてしまう。しかし、無縄すなわちわれを縛る縄などは本来は存在していないのであり、このことをしっかり意識の中に持つべきである。

従って無縄白縛の状態に陥った時はまず思いを一新することである。気持ちを新たにし、いたずらに当たりを求めず、勝を望まず、心気を丹田に納め<sup>ほんこんいつてき</sup>乾坤一擲をもってただ、進退、屈伸、左転、右転、打突の大技を尽くすのである。そうすると、たちまち無縄の縄が断ち切られて解放され、自由奔放な技が縦横に出て、一段の進歩がみられるようになる。

初心に立ち返り基本にもどる中、元々縄など無かったことを識り、再び進歩の道を歩むのである。

## 真の心

さわる、はじく、たたく、これも相手の心を知る助けとなるが、一刀流で張るという場合は、必ず自然と元に復することを大事とし、それを教える。元に復するとは、太鼓を打って、打つと同時に初めにもどるのと同じである。

そしてその張りをもって真の心をまなぶのだが、相手の竹刀を張るのは奇正をかけるのでなく、表裏をはかるのでもなく、少しの偽りもなく、わが心の実をもって相手の心の真只中を一心不乱に張るのである。これを、張り・真の心という。相手は心技体が張り破られて動転し、わが切先は相



手の真只中を指してすわり、そのまま相手を制し貫いて勝つことになる。

人の<sup>きそく</sup>氣息を<sup>うかが</sup>窺い、その虚をねらって打とうとするのではない。また相手を陥れようとするのではない。わが真の心をもって相手の心貫き通す実の実を仕うのである。

張ると相手の心、気がこちらにきているかが分かる。相手の竹刀

を張ったとして、相手がたとえ軽くもっていても、心が動かず、気がずっと通っているなら、相手

の竹刀には余裕が見られ、揺れることがない。逆に気がしっかりこちらに向いていない場合は、バンとたたき落とせるものである。

つまり張りによって、心の実から発せられた気をずっと前に通すのである。一刀流ではそのまま技としての勝となるが、剣道ではそうはいかない。剣道では面、小手、胴、突きが決まって勝利を得るのである。ただし、張ることによって相手の心をしり、心を動かし、豪気をくじくことができたなら、それは心気の争いに勝つことになる。その意味では一刀流の技としての勝と同じである。まやかしての勝、あるいは引っかけての勝とは大きな隔たりを認めるところでもある。いうなれば、真っ向うから実をもって実と相対し、互いに気を前へ通し合い、剣先を剣先でさわり、<sup>しのぎ</sup>鑄を削り合う中、時にはじき、時に張る。心と心、気と気、実と実がぶつかる。そして優勢と劣勢が生まれ、劣勢の方に虚が現われ、勝と負に帰結する。この張り・真の心は、そう理解することもできる。

真の心とは中の心、真ん中の心である。中の心は忠である。忠は満ちわたって欠けなき実の心である。忠は私欲邪念を<sup>ふしよくめつきやく</sup>払拭滅却し、おのれを空虚にすることによって初めて得られる真鋭の位である。

<sup>しむじや</sup>思無邪という教え、これは心に邪悪の思いがないことである。そして、こうしよう、ああしよう<sup>しむじや</sup>と心動くのはみな邪気である。相手がどんなに仕掛けてきても、平常心で心静かに明らかであり、思邪なければ相手の虚実変化がよく見えて、打つべきところも明らかに心に映り、自然によいところに働いて勝を制するものである。

従って忠は思無邪とつながり、欠けなき実の心とは思無邪の平常心を意味するのである。つまり真心であり、誠心である。

一刀流にもどって、技においては中段より切先を相手の<sup>みげん</sup>眉間を指して真っ直ぐ伸ばし、相手の刀と心技体を一挙に張って、わが切先を相手の真只中に指し貫いて勝つところ、この真の心技を仕い<sup>しんま</sup>なれることが大事である。

この張り・真の心が剣道をより<sup>しんま</sup>深淵に導くのである。

笹 森 建 美(ささもりたけみ) 幼少の頃より第16代宗家の父・笹森順造について、小野派一刀流を学ぶ。早稲田大学卒業後、青山学院大学神学部<sup>しんがくぶ</sup>に学士入学し、2年間の勉強を終えて渡米する。帰国後青山学院中等部に勤務。平成3年3月宗教主任を辞して、駒場エデン教会を中心にキリスト教の宣教活動に力を入れる。小野派一刀流の他、津軽藩伝承の神夢想林崎流、直元流大長刀術を継承し、研修稽古を重ねる。また、キリスト教と武道との関係を研究し、発表している。昭和8年青森県弘前市に生まれる。小野派一刀流第17代宗家、神学博士。

[剣道時代 1999 4月号より転載]